

平成28年度 伊那市立伊那北小学校評価表

学校関係者評価；(A：十分達成された B：ほぼ達成された C：不十分であった) 自己(項目間相対を加味した到達度)評価(a：十分達成された b：ほぼ達成された c：不十分であった)

学校教育目標	重点目標(中長期的目標)
かしこく なかよく たくましく	地域の中の信頼される学校 子どもたちにとって、こころゆく学校生活の創造
	今年度の重点目標
	(1)「かしこく」とは・・・単なる知識の伝達や蓄積にとどまらない本当の「賢さ」(知恵)の育成、【対話】【学力向上プラン】
	(2)「なかよく」とは・・・共に学び、共に生活するかけがえのない存在としての他者(自己)の自覚、【歌声】、【学力を支える学級力】
	(3)「たくましく」とは・・・自然環境を生かした体験活動を通して育つ心身にたくましい子ども、【体験】、【心と体の体力づくり】
(4)特別支援教育の充実・・・すべての学習の基盤となる特別支援教育、【ユニバーサルデザイン】	

総合評価		
○コミュニティスクールとして学校応援団を積極的に活用した結果、「体験活動を通して子どもを育てる」や「整った学校環境」部分で学校関係者の評価が高まった。ランドデザインに基づく重点的な取り組みの成果といえる。 ○学力については、学力調査の数字には十分反映されていないが、算数好きが増え、漢字が書ける子が増える等の成果は表れてきている。 ○約9割の子が「学校は楽しい」「安心」と考えており、全体としては学校が落ち着いてきている。しかし一部、情動が安定しない子の周囲にいる子たちが不安を感じている実態もある。		
成果と課題	評価	改善策・向上策
(1) 児童評価で89.7%、保護者評価で84.8%は肯定的に評価している。多くの教員が、分かりやすくねらいを明確にした授業に取り組んでいる。読書を週の日課の中に帯で入れたことで、読書量が増え、落ち着いて1日の学習を始められるようになった	B b	(1) 各教科で本時のめあて、本時のまとめを明記するとともに、話す力・聞く力・話し合う力・活用力を高めるための工夫をする。学びの基本(北小ベーシック)の導入と活用。道村式の推進で漢字学習にかかる子どもへの負担を軽減しつつ学力を高める。
(2) 「学級力」については、QUの検査を2回行い、特に2回目はその変容について学級の課題をグループ討議で共有しつつ年度後半の経営に生かし課題にいち早く対応できた。「歌声」は澄んできてはいるが、保護者児童とも自己評価はやや低下している。	B b	(2) 「QU」による学級経営の見直しは効果があることが分かったので、来年度は学年を広げ、討議してよりよい学級作りができるようにする。1学期の音楽会も定着してきており、年度の初めに歌声を通して学級のまとまりも育つようにしていく。
(3) 保護者の94.4%、評議員は全員から肯定的評価をされている。学校応援団の力を借りつつ、里山での活動や野菜・米作りなどの活動は徐々に充実してきている。また、各学年で育てた作物を給食に出してもらうなど食育にも取り組んだ。	A a	(3) 体験だけで終わってしまうことがあるので、それを学びに発展させる実践事例を蓄積し広めていきたい。また、相互にメリットを考えつつ交流していくことで、学校応援団やPTAとの連携をより深めていきたい。
(4) 校内支援会議を随時開き、スピーディーな情報把握と対応ができた。また、職員研修の実施等を通して、合理的配慮も含め、授業のユニバーサルデザイン化推進を図った。実態に合わせたユニバーサルデザイン化については、更なる研究が必要。	A a	(4) フェイスシートを随時記入し、その蓄積されたデータをよりよい支援のために有効活用するとともに、特別支援学級担当者と原学級担任との緊密な情報交換や指導方針の共通理解が円滑になされるようにしたい。また、双方開かれた学級を目指したい。

領域	対象	評価項目	評価の観点
教育課程	教育課程	○体験を通して学ぶ教育活動の展開	(1) 子どもの生活の中や体験的な活動から課題を見つける授業の工夫ができたか。
		○客観的な学力・課題の把握	(2) 客観的な学力の把握と課題解決に向けての実践ができたか。
	学習指導	○授業のねらいを明確にした学習活動やめりはりのある授業展開 ○自己表現力の育成と、それを受け入れることができる人間関係づくり。	(1) 「ねらい・めりはり・見とどけ」を大切にされた対話ある授業への改善ができたか。 (2) 自己表現力の育成と、それを受け入れることができる人間関係づくりができたか。
生徒指導	生徒指導	○チームワークで取り組む生徒指導	(1) 生徒指導上の問題を、学年主任、生徒指導主事のもとに情報収集し、全校職員のチームワークで指導にあたることができたか。 (2) 特に支援を要する児童に対して、フェイスシートを活かして全職員で連携して指導にあたることができたか。
		生活指導	○「あいさつ、ありがとう、そうじ、くつろえ」の4つの生活目標を軸とした生活指導
	地域との連携	地域との連携	○学校応援団、水辺づくりを通して地域社会と連携を図り、内外に開かれた学校
○児童の成長を願いPTAと連携し学校教育を進め、家庭教育を支援する			(2) 家庭訪問・保護者懇談会、授業参観や懇談会の充実、児童の体や心を考える講演会等の実施・教育相談を通して家庭と連携し子どもの指導にあたれたか。
研修		○自己研鑽 ○授業改善	(1) 自己課題を持ち、校内外の研修に積極的に参加できたか。 (2) 年に一度、授業を公開して、お互いに参観しあうことを通して、研修を深め、自己課題を持つことができたか。

成果と課題	評価	改善策・向上策
(1) トンボやチョウ、シュンランの生態を年間通して追ったり、それぞれに里山と関わったり、子ども達の課題を繋いでいった総合的な学習の実践ができた。低学年では育てた作物を日常生活と結びつけて調理する等出来た。	A a	・総合的な学習発表交流会」を積極的にとらえ、ダイナミックな活動を志向したい。 ・総合生活ともに体験的な活動を重視する中で学力が向上する教育課程を工夫したい。
(2) 全国学力調査やPDCAの結果等を元にした学力や課題の把握と改善を志向した。評価にCDTを取り入れ個別に課題をはっきりさせ、保護者と共有した。外国籍児の日本語習得状況を「大空検定」で把握した。	B b	・課題を改善するための「伊那北ベーシック」の活用と推進をする。 ・低学年、高学年、特別支援の重点研究部会で、よりよい授業実践を目指す。 ・家庭学習については、家庭の協力を得られる工夫をする。
(1) 授業が分かりやすいとする児童は89%。少人数学習指導や道村式の漢字学習が成果をあげている。 児童自らが主体的に取り組む授業への改善は、どこまでも続けたい。	A b	・授業改善を図り、どのクラスでも質の高い授業を提供するための「伊那北ベーシック」の活用と推進をする。 ・低学年、高学年、特別支援の重点研究部会で、よりよい授業実践を目指す。
(2) 発言する児童が決まってきたクラスもあったため、トリオなどグループ活動を充実させてきた。多様な児童がいるので、一人ひとりのみとりを大切にしつつより充実した支援の方向を考えていきたい。	B b	・特に高学年で自己表現が苦手な子が多く、これから個性に寄り添って表現力を育てる活動の工夫や授業改善に取り組んでいきたい。 ・トリオ学習等、話す聞く力を高めるための学習方法を更に工夫する。
(1) 学年会を通して情報の共有ができ、生徒指導係を中心に事が起きた際に素早い対応が出来た。いじめアンケートやQUを指導に活かした。 保護者との連携が思うようにいかない事例がある。	B a	・指導がうまくいかない場合に担任が一人で抱え込むことなく、特に保護者と担任が1対1にならずにチームで対応することを今後も大事にする。 PTA役員会にも協力してもらい対立でなく同じ方向を向けるようにする。
(2) フェイスシートは、昨年より活用でき迅速に対応できた。ただ、問題行動があった際にその詳細や指導が全職員に伝わらないこともあった。	b	・月1回の学年主任会で、学年ごとに生徒・生活指導の方向を協議し、今以上に迅速に課題対応できるようにするとともに、課題発生子予防に努める。
(1) 1年を通して職員や児童会が取り組んだ。また、見守り隊の他に、ウォーキング隊を組織し、登下校の安全と挨拶の励行に努め、成果が出せた。	B a	・見守り隊、ウォーキング隊、家庭とも更に連携して、あいさつを柱に地域のいろんな人との絆を強められるように指導していく。
(2) 授業の開始、終了時刻は昨年よりきちんととしてきて、授業中に出歩く子はほとんどいない。下校時刻は高学年で守れない子もいる。	B b	・学級によって差が出てしまうのは、児童の問題ではなく担任の意識の違いであることを自覚して全職員が足並みを揃えて指導にあたる。
(3) 職員全員が児童と一緒に清掃しつつ、自ら無言清掃に努めた。 なかよし(縦割り)清掃を計画的に実施したことで、子どもたちが自らの姿を見返す機会になった。	B a	・児童と共に一心に清掃する先生の姿から学びたい。 ・清掃委員会が「無言清掃」を柱にし、縦割り清掃を年に数回行うことで定期的に見返しができるようにする。
(1) 2ヶ月に一度のペースで学校応援団運営委員会を設け、課題を明確化してとりくみ5カテゴリー・27チームの応援団を組織した。また、地域協働の水辺づくりを通して、地域協働のシンボルを作ることが出来た。水辺の活用の仕方が課題である。	A a	・学校応援団として必要なボランティアを更に募集していく。水辺については地域協働となるよう活用を工夫していく。学校便りはさらに充実させつつ、情報がより豊かに地域保護者と共有できるよう内容を工夫していく。
(2) PTAと児童にネットトラブル防止について啓発する講演会を実施した。 「困った問題が発生した時気軽に学校に相談できる」とする保護者が93%。気になる児童には問題発生前に家庭と連絡を取り合い、共に前向きに考え合うようにしてきた。	B b	・今後も、学校や学級から魅力ある発信をしていくようにする。 ・複雑な家庭環境もあるので、担任が一人で抱え込まずに教育委員会や児童相談所、医療等の機関の力を借りながら、保護者、本人を支援していく。
(1) 道村式漢字学習法、植村先生の講演会、ネットトラブル防止等について校内においても多くの研修の機会を設け、主体的に参加できた。	a	・今後も、学校独自の研修の場を設けるとともに、全教職員が自己課題に即した自主的研究と修養に努める学校づくりをする。
(2) 「低学年」「中学年」「高学年」「特別支援」の4つの重点研究部会の中で、授業の公開や研修を深めた。	b	・来年度は、重点研究部会を低学年、高学年、特別支援の3つとし、全教員が気軽に授業を公開し、互いに学びあい、高め合うことを目指したい。

